

メーロストロムの旋渦

A DESCENT INTO THE MAELSTROM

エドガー・アラン・ポー Edgar Allan Poe

青空文庫

自然における神の道は、
摂理におけると同様に、わ
れら人間の道と異なってい
る。また、われらの造る模
型は、広大深玄であつて測
り知れない神の業わざにはとう

ていかなわない。まったく
神の業はデモクリタスの井
戸よりも深い。

ジヨオゼフ・グランヴェイル

私たちはそのとき峨^が々^がとしてそびえ立つ岩の頂上にたどりつ
た。四、五分のあいだ老人はへとへとに疲れきって口もきけな
いようであった。

「まだそんなに古いことではありません」と、彼はとうとう話しました。「そのころでしたら、末の息子と同じくらいにらくらくと、この道をご案内できたのですがね。それが三年ほど前に私は、どんな人間も遭ったことのないような——たとえ遭ったにしても、生き残ってそれを話すことなんぞはとてできないような——恐ろしい目に遭って、そのときの六時間の死ぬような恐ろしさのために、体も心もすっかり参ってしまったものでしてね。あなたは私をずいぶん老人だと思っていらっしゃる——が、ほんとうはそうじゃないのですよ。たった一日もたたないうちに、真つ黒だった髪の毛がこんなに白くなり、手足の力もなくなつて、神経が弱つてしまいました。だからいまでは、ほんのちよいとした仕事に

も体がぶるぶる震え、ものの影にもおびえるような有様です。こんな小さい崖がけから見下ろしても眩暈めまいがするんですからね」

その「小さい崖」の縁に、彼は体の重みの半分以上も突き出るくらい無頓着むとんじやくに身を投げだして休んでいて、ただ片肘かたひじをそのなめらかな崖ぎわにかけて落ちないようにしているだけなのであるが、——この「小さい崖」というのは、なんのさえぎるものもない、切り立った、黒く光っている岩の絶壁であって、私たちの下にある重なりあつた岩の群れから、ざつと千五、六百フィートもそびえ立っているのである。どんなことがあるかと、私などはその崖の端から六ヤード以内のところへ入る気がしなかつたろう。実際、私は同行者のこの危険この上ない姿勢じぎもにまったく度胆どたんを抜

かれてしまい、地上にぴったりと腹這いはらばになって、身のまわりの灌木かんぼくにしがみついたまま、上を向いて空を仰ぐ元気さえなかった。——また吹きすさぶ風のために山が根から崩れそうだったという考えを振りおとそうと一所懸命に努めたが、それがなかなかできないのであった。どうにか考えなおして坐すわって遠くを眺ながめるだけの勇氣を出すまでには、だいぶ時間がかかった。

「そんな弱い心持は、追っばらってしまったねばなりません」と案内者が言った。「さつき申しましたあの出来事の場所全体がいちばんよく見渡せるようにと思つて、あなたをここへお連れしてきたので——ちようど眼めの下にその場所を見ながら、一部始終のお話をしようというのですから」

「私たちはいま」と彼はその特徴である詳しい話しぶりで話をつづけた、——「私たちはいま、ノルウエーの海岸に接して——北緯六十八度——広大なノルドランド州の——淋さびしいロフオーデン地方にいます。いまそのてっぺんに坐っているこの山は、ヘルゼツゲン、雲の山です。さあ、もう少し伸びあがってください、——眩暈がするようでしたら草につかまって——そう、そんなふうに——そうして、帯のようになってもやいる霧の向うの、海の方をご覧なさい」

私は眩暈がしそうになりながらも見た。すると広々した大洋が見える。その水の色はインクのように黒いので、私の頭にはすぐヌビアの地理学者の書いた *Mare Tenebrarum* (1) についての記

述が思い出された。これ以上に痛ましくも こうりよう 荒 寥 とした パノラマ 展望
は、どんな人間の想像でも決して思い浮べることができない。右
を見ても左を見ても眼のとどくかぎり、恐ろしいくらいに黒い突
き出た絶壁が、この世界の城壁のように長くつらなっている。そ
の絶壁の陰鬱いんうつな感じは、永遠に咆哮ほうこうし号叫しながら、それに
ぶつかって白いもの凄すごい波頭を高くあげている寄波よせなみのために、
いつそう強くされているばかりであった。私たちがその頂上に坐
っている岬みさきにちようど向きあつて、五、六マイルほど離れた沖に、
荒れ果てた小島が見えた。もつとはつきり言えば、果てしのない
はとう波濤の彼方かなたに、それにとり囲まれてその位置が見分けられた。そ
れから約二マイルばかり陸に近いところに、それより小さな島が

もう一つあった。岩石で恐ろしくごつごつした不毛な島で、一群の黒い岩がその周囲に点々として散在している。

海の様子は、この遠い方の島と海岸とのあいだのところでは、なにかしらひどく並々でないところがあった。このとき疾風が非常に強く陸の方へ向つて吹いていたので、遠くの沖合の二本マストの帆船が二つの縮帆部リーフをちぢめた縦帆トライセイルを張つて停船（2）し、しかもなお、その全船体をしきりに波間に没入していたが、その島と海岸とのあいだだけは、規則的な波のうねりらしいものがぜんぜんなく、ただ、あらゆる方向に——風に向つた方にもその他の方向と同じように——海水が短く、急速に、怒つたように、逆にほとばしっているだけであつた。泡あわは岩のすぐ近いところの

ほかにはほとんど見えない。

「あの遠い方の島は」と老人はまた話しはじめた。「ノルウエー人がヴァルーと言っています。真ん中の島はモスケーです。それから一マイル北の方にあるのはアンバーレン。向うにあるのはイスレーゼン、ホットホルム、ケイルドヘルム、スアルヴェン、ブツクホルム。もつと遠くの——モスケーとヴァルーとのあいだには——オツテルホルムとフリーメンとサンドフレーゼンと、ストツクホルムとがあります。これはみんなほんとうの地名なんです。が——いったいどうしてこういちいち名をつける必要があったのかかということは、あなたにも私にもわからないことです。そら、なにか聞えませんか？　水の様子になにか変わったことがあるのが

わかりませんか？」

私たちはヘルゼツゲンの頂上にもう十分ばかりいた。ここへ来るにはロフォーデンの奥の方からやってきたので、途中では海がちつとも見えなくて、絶頂に来て初めて海がぱつと眼の前に展開したのである。老人がそう言ったときに、私はアメリカの大草^{プレアリ}原¹における野牛の大群の咆哮のようなだんだんと高まってゆく騒々しい物音に気がついた。と同時にまた、眼の下に見えていた船乗りたちのいわゆる狂い波（3）が、急速に東の方へ流れる潮流に変わりつつあることに気がついた。みるみるうちに、この潮流はすさまじく速くなった。刻一刻と速さを増し——せつかちな激しさを加えた。五分もたつと、ヴァルーまでの海は一面に抑えき

れぬ狂瀾怒濤をまき上げた。が、怒濤のいちばんひどく猛りたけ狂っているのはモスケーと海岸とのあいだであつた。そこではひろびろとたたえている海水が、裂けて割れて無数の衝突しあう水路になつたかと思つと、たちまち狂おしく瘡攣けいれんし、——高まり、湧きたち、ざわめき、——巨大な無数の渦うずとなつて旋回し、まさかさまに落下する急流のほかにはどこにも見られぬような速さで、渦巻きながら、突進しながら、東の方へ流れてゆく。

それからさらに四、五分たつと、この光景にまた一つの根本的な変化が起つた。海面は一般にいくらか穏やかになり、渦巻は一つ一つ消えて、不思議な泡の縞しまがいままでなにもなかつたところにあらわれるようになったのだ。この縞はしまいにはずつと遠く

の方までひろがってゆき、互いに結びあつて、いったん鎮しずまった渦巻の旋回運動をふたたび始め、さらに巨大な渦巻の萌芽ほうがを形づくろうとしているようであつた。とつぜん——まったくとつぜんに——これがはつきり定まった形をとり、直径一マイル以上もある円をなした。その渦巻の縁は、白く光っている飛沫しぶきの幅の広い帯となつている。しかしその飛沫の一滴さえもこの恐ろしい漏しやう斗ごの口のなかへ落ちこまない。その漏斗の内側は、眼のとどくかぎり、なめらかな、きらきら輝いている黒こくぎよく玉たまのように黒い水の壁であつて、水平線にたいして約四十五度の角度で傾斜し、揺らぎながら恐ろしい速さで目まぐるしくぐるまわり、なかば号叫し、なかば咆哮し、かのナイヤガラの大瀑布だいはくふが天に向つ

てあげる苦悶くもんの声さえかなわなような、すさまじい声を風に向
つてあげているのだ。

山はその根からうち震え、岩は揺れた。私はぴったりとひれ伏
して、神経の激動のあまり少しばかりの草にしがみついた。

「これこそ」と、私はやっと老人に言った、——「これこそ、あ
のメールストロム（4）の大渦巻なんですね」

「ときには、そうも言いますが」と彼は言った。「私もノルウ
エー人は、あの真ん中にあるモスケー島の名をとつて、モスケー
・ストロムと言っております」

この渦巻についての普通の記述は、いま眼の前に見たこの光景
にたいして、少しも私に前もつて覚悟させてくれなかった。ヨナ

ス・ラムス（5）の記述はおそらくどれよりもいちばん詳しいものではあろうが、この光景の雄大さ、あるいは恐ろしさ——あるいは見る者の度胆を抜くこの奇観の心を奪うような感じ——のちよつとした概念をも伝えることができない。私はこの著者がどんな地点から、またどんな時刻に、この渦巻を見たのかは知らないが、それはヘルゼツゲンの頂上からでもなく、また嵐の吹いてい^{あらし}るあいだでもなかつたにちがいない。しかし彼の記述のなかには、その光景の印象を伝えるにはたいへん効果は弱い^{あらし}が、その詳しい点で引用してもよい数節がある。

彼はこう書いている。「ロフォーデンとモスケーとのあいだにおいて^{ひろ}は、水深三十五尋ないし四十尋なり。されど他の側におい

ては、ヴェル（ヴァルー）に向いてこの深さはしだいに減り、船舶の航行に不便にして、静穏な天候のおりにもしばしば岩礁がんしょうのために難破するの危険あり。満潮時には潮流は猛烈なる速度をもつてロフオーデンとモスケーとのあいだを陸に向つて奔流す。されどその激烈なる退潮時の咆哮にいたりては、もつとも恐ろしき轟々ごうごうたる大瀑布も及ぶところにあらず、——その響きは数リーグの遠きに達す。しかしてその渦巻すなわち凹くぼみは広くかつ深くして、もし船舶にしてその吸引力圏内に入るときは、かならず吸いこまれ海底に運び去られて岩礁に打ちくだかれ、水力衰うるに及び、その破片ふたび水面に投げ出されるなり。しかれども、かく平穩なる間隙かんげきは潮の干満の交代時に、しかも天候静穏の日

に見るのみにして、十五分間継続するにすぎず、その猛威はふたびしだいに加わる。潮流もつとも猛烈にして暴風によつてさらにその狂暴を加うるときは、一ノルウエー・マイル以内に入ること危険なり。この圏内に入らざるうちにそれにたいして警戒するところなかりしたため、端艇、快走船、船舶など多く海底に運び去られたり。同様に鯨群げいぐんのこの潮流の近くに来たり、その激烈なる水勢に巻きこまるること少なからず、逃れんとするむなしき努力のなかに叫喚し、怒号するさまは筆の及ぶところにあらず。かつて一頭の熊くま口フオーデンよりモスケーに泳ぎわたらんとして潮流に巻きこまれて押し流され、そのもの凄く咆哮する声は遠く岸にも聞えたるほどなりき。樅もみ、松などの大なる幹、潮流に吞のまれ

たるのちふたび浮び上がるや、はなはだしく折れ砕けてあたたもそが上に剛毛あらげを生ぜるがごとく見ゆ。こは明らかに、渦巻の底の峨々ががたる岩石より成り、そのあいだにこれらの木材のあちこちと回転することを示すものなり。この潮流は海水の干満によりて支配せらる、——すなわち常に六時間ごとに高潮となり落潮となる。一六四五年、四旬齋前セクサゼシマ第二日曜の早朝、その怒号狂瀾ことにはげしく、ために海辺なる家屋の石材すら地に崩落せり」

水深については、どうして渦巻のすぐ近くでこういうことが確かめられたか私にはわからぬ。この「四十尋」というのは、モスケーかあるいはロフォーデンかどちらかの岸に近い、海峡の一部にだけあてはまることにちがいない。モスケー・ストロムの中

心の深さはもつと大したものにちがひなく、この事実のなにより
の証拠は、ヘルゼツゲンの頂の岩上からこの渦卷の深淵しんえんをなな
めに一見するだけで十分である。この高峰から眼下の咆哮する
Hlegethon (6) を見下ろしながら、私は鯨や熊の話をも信じが
たい事がらのように書いているかの善良なヨナス・ラムス先生の
単純さに微笑せずにはいられなかった。というのは、現存の最大
の戦艦艦でさえ、この恐ろしい吸引力のおよぶ範囲内に来れば、
一片の羽毛が台風に吹きまくられるようになるの抵抗もできずに、
たちまちその姿をなくしてしまうことは、実にわかりきったこと
に思われたからである。

この現象を説明しようとした記述は、そのなかのある部分は、

読んでいるときには十分もつともらしく思われたようだったが――
 いまではひどく異なった不満足なものになった。一般に信じら
 れている考えでは、この渦巻は、フェロー諸島（7）のあいだに
 ある三つの、これより小さな渦巻と同様に、「その原因、満潮お
 よび干潮にさいして漲ちようらく落りやくする波濤が岩石および暗礁の稜りように激
 して互いに衝突するためにほかならず、海水はその岩石暗礁にせ
 きとめられて瀑布のごとく急下す、かくて潮の上ること高ければ
 その落下はますます深かるべく、これらの当然の結果として旋渦せんか
 すなわち渦巻を生じ、その巨大なる吸引力はより小なる実験によ
 りても十分知るを得べし」というのである。以上は『大エンサイクロピ英
 百科全書』のしるすところである。キルヘル（8）やそ

他の人々は、メールストロムの海峡の中心には、地球を貫いてどこか非常に遠いところ——以前はボスニア湾（9）がかなり断定的に挙げられた——へ出ている深淵がある、と想像している。

この意見は、本来はなんの根拠もないものではあるが、目のあたりに眺めたときには私の想像力がすぐなるほどと思ったものであった。そしてそれを案内者に話すと、彼は、このことはノルウエー人のほとんどみながいだいている見方ではあるが、自分はそう思っていないといったので、私はちよつと意外に思った。しかし、この見方については、彼は自分の力では理解することができないということを告白したが、その点では私はまったく同感であった。——なぜなら、理論上ではどんなに決定的なものであっても、こ

の深淵の雷のような轟とどろきのなかにあつては、それはまったく不可解なばかげたものとさえなつてしまうからである。

「もう渦巻は十分ご覧になつたでしょう」と老人は言った。「そこでこの岩をまわつて風のあたらしぬ陰へ行き、水の轟きの弱くなるところで、話をしましょう。それをお聞きになれば、私がモスケー・ストロムについていくらかは知っているはずだということがおわかりになるでしょう」

老人の言つた所へ行くと、彼は話しはじめた。

「私と二人の兄弟とはもと、七十トン積みばかりのスクーター帆式の漁船を一艘そう持つていて、それでいつもモスケーの向うの、ヴァルーに近い島々のあいだで、漁をすることにしておりました。

すべて海でひどい渦を巻いているところは、やってみる元気さえあるなら、時機のよいときにはなかなかいい漁があるものです。が、ロフォーデンの漁師全体のなかで私ども三人だけが、いま申し上げたようにその島々へ出かけてゆくのを決った仕事にしていた者なのでした。普通の漁場はそれからずっと南の方へ下ったところですよ。そこではいつでも大した危険もなく魚がとれるので、誰でもその場所の方へ行きます。だが、この岩のあいだのえりぬきの場所は、上等な種類の魚がとれるばかりではなく、数もずつとたくさんなので、私どもはよく、同じ商売の臆おくびよう病びょうな連中が一週間かかってもかき集めることのできないくらいの魚を、たった一日でとったものでした。実際、私どもは命がけの投機やま仕事を

していたので——骨を折るかわりに命を賭け、勇気を資本もとでにしていた、というわけですね。

私どもは船を、ここから海岸に沿うて五マイルほど上かみへ行つたところの入江に繋つないでおきました。そして天気の良い日に十五分間の滞潮よじみを利用して、モスケー・ストロムの本海峡を横ぎつて淵ふちのずっと上手につき進み、渦流うずがよそほどはげしくないオツテルホルムやサンドフレーゼンの近くへ下つて行つて、錨いかりを下ろすことにしていました。そこでいつも次の滞潮よじみに近いころまでいて、それから錨を揚げて帰りました。行くにも帰るにも確かな横風がないと決して出かけませんでした、——着くまでは大丈夫やまないと思えるようなやつですね、——そしてこの点では、私どもは

めつたに見込み違いをしたことはありませんでした。六年間に二度、まったくの無風のために、一晩じゆう錨を下ろしたままではなければならぬことがありました。がそんなことはこの辺ではまったく稀まれなことなのです。それから一度は、私どもが漁場へ着いて間もなく疾風はやてが吹き起つて、帰ることなどは思いもよらないくらいに海峡がひどく大荒れになったために、一週間近くも漁場に留とどまつていなければならなくて、餓死うえじにしようとしたことがありました。あのときは、もし私どもがああ無数の逆潮流——今日はこちらにあるかと思うと明日はなくなっているあの逆潮流——の一つのなかへうまく流れこまなかつたとしたら、（なにしろ渦巻が猛烈に荒れて船がぐるぐるまわされるので、とうとう錨をもつ

らせてそれを引きずったような有様でしたから）どんなに手をつくしても沖へ押しながされてしまったでしょうが、その逆潮流が私どもをフリーメンの風下かざしもの方へ押し流し、そこで運よく投とうび錨ようすることができたのでした。

私どもが『漁場で』遭った難儀は、その二十分の一もお話してきません、——なにしろそこは、天気の良いときでもいやな場所なんです、——だが私どもは、どうにかこうにか、いつも大したこともなくモスケー・ストロムの虎口ここうを通りぬけていました。それでもときどき、滞潮よどみに一分ほど遅れたり早すぎたりしたときには、肝っ玉がひっくり返ったものですよ。またときによると、出帆するときには風が思ったほど強くなって、望みどおりに進むこと

ができず、そのうちに潮流のために船が自由にならなくなるようなこともありました。兄には十八になる息子がありましたし、私にも丈夫な奴やつが二人ありました。この連中がそんなときにいけば、おおかい大こ橈こを漕ぐのにも、あとで魚をとるときにも、よほど助けになつたでしょうが、どうしたのか、自分たちはそんな冒険をしていても、若い連中をその危険な仕事のなかへひき入れようという気はありませんでした、——なんとと言っても結局、恐ろしい危険なことでしたからね。

もう五、六日もたてば、私がいまからお話しようとしていることが起つてから、ちようど三年になります。一八——年の七月十八日のことでした。その日をこの地方の者は決して忘れますまい、

——というのは、開かいびやく闕くわつ以来吹いたことのないような、実に恐ろしい台風の吹きあれた日ですから。だが午前中いっぱい、それから午後も遅くまで、ずっと穏やかな西南の微風が吹いていて、陽ひが照り輝いていたので、私どものあいだでもいちばん年寄りの経験のある船乗りでさえ、そのあとにつづいて起ることを見とおすことができなかつたくらいです。

私ども三人——二人の兄弟と私——は、午後之二時ごろ例の島の方へ渡つて、間もなく見事な魚をほとんど船いっぱいいに積みましたが、その日はそれまでに一度もなかつたほど、たくさんとれたと三人とも話し合いました。いよいよ錨いかりを揚げて帰りかけたのは、私の時計でちょうど七時。ストロムでいちばんの難所よどみを滞潮

のときに通りぬけようというのです。それは八時だということが私どもにはわかっているのです。

私どもは右舷うげん後方にさわやかな風を受けて出かけ、しばらくはすばらしい速力で水を切って進み、危険なことがあるなどとは夢にも思いませんでした。実際そんなことを懸念けねんする理由は少しもなかったのですから。ところが、たちまち、ヘルゼツゲンの峰越しに吹きおろす風のために、船は裏帆（二〇）になってしまいました。こういうことはまったくただならぬ——それまでに私どもも遭ったことのないようなことなので、はつきりなぜということもわかりませんでした。私どもはちよつと不安を感じはじめました。私どもは船を詰め開き（二一）にしましたが、少し

も渦流うずを乗り切つて進むことができません。で、私がもとの停泊所へ戻ろうかということを言いだそうとしたそのとたん、艦ともの方を見ると、実に驚くべき速さでむくむくと湧き上がる、奇妙な銅色をした雲が、水平線をすっかり蔽おほっているのに気がついたのです。

そのうちにいままで向い風であつた風がぱったり落ちて、まったく風ないでしまい、船はあちこちと漂いました。しかしこの状態は、私どもがそれについてなにか考える暇があるほど、長くはつづきませんでした。一分とたたないうちに嵐がおそつてきました、——二分とたたないうちに空はすっかり雲で蔽おほわれました、——そして、その雲と跳びかかる飛沫しぶきとのためにたちまち、船のなか

でお互いの姿を見ることもできないくらい、あたりが暗くなつてしまいました。

そのとき吹いたような台風のことをお話ししようとするのは愚かなことです。ノルウェーじゆうでいちばん年寄りの船乗りだつて、あれほどのには遭つたことはありますまい。私どもはその台風がすっかりおそつてこないうちに帆索ほづなをゆるめておきましたが、最初の一吹きで、二本の檣マスあこぎりは鋸でひき切つたように折れて海へとばされました。その大メインマスト檣のほうには弟が用心のために体を結えていたのですが、それと一緒にさらわれてしまったのです。

私どもの船はいままで水に浮んだ船のなかでもいちばん軽い羽毛はねのようなものでした。それはすっかり平甲板(デッキ)が張つて

あり、舳へさきの近くに小さな艙口ハッチが一つあるだけで、この艙口ハッチはストロムを渡ろうとするときには、例の狂い波の海にたいする用心として、しめておくのが習慣になっていました。こうしてなかつたらすぐにも浸水して沈没したでしょう。——というのは、しばらくのあいだは船はまったく水にもぐっていたからです。どうして兄が助かったのか私にはわかりませんが、確かめる機会もなかつたものですから。私はと言いますと、フオアマスト前はらば 檣マストの帆索をゆるめるとすぐ、甲板の上にびつたりと腹這いはらばになって、両足は舳のせまい上縁うわべりにしつかり踏んばり、両手では前檣の根もとの近くにあるリング・ボルト環付螺釘ボルト（E）をつかんでいました。それはたしかに私のできることでしては最上の方法でしたが——こんなふうに私をさせ

たのは、まったくただ本能でした。——というのは、ひどくうろたえていて、ものを考えるなんてことはとてもできなかつたのですから。

しばらくのあいだはいま申しましたとおり、船はまったく水につかっていたましたが、そのあいだ私はずっと息をこらえて螺釘ポールトにしがみついていました。それがもう辛抱できなくなると、手はなおもはなさずに、膝ひざをついて体を上げ、首を水の上へ出しました。やがて私どもの小さな船は、ちょうど犬が水から出てきたときにするように、ぶるぶるつと一ふるいして、海水をいくらか振りおとしました。それから私は、気が遠くなっていたのを取りなおして、意識をはつきりさせてどうしたらいいか考えようとして

いたときに、誰かが自分の腕をつかむのを感じました。それは兄だったのです。兄が波にさらわれたものと思いこんでいたものですから、私の心は喜びで跳びたちました、——が次の瞬間、この喜びはたちまち一変して恐怖となりました、——兄が私の耳もとに口をよせて一こと、『モスケー・ストロムだ!』と叫んだからです。

そのときの私の心持がどんなものだったかは、誰にも決してわかりません。私はまるで猛烈な瘡おこりの発作におそわれたように、頭のとっぺんから足の爪つまさき先まで、がたがた震えました。私には兄がその一ことで言おうとしたことが十分よくわかりました、兄が私に知らせようとしたことがよくわかりました。船にいま吹き

つけている風のために、私たちはストロムの渦巻うずまきの方へ押し流されることになっていくのです、そしてもうどんなことも私たちが救うことができないのです！

ストロムの海峡を渡るときにはいつでも、たといどんなに天気よどみの穏やかなときでも、渦巻のずっと上手の方へ行つて、それから滞潮よどみのときを注意深くうかがって待つていなければならぬ、ということはお話ししましたね。——ところがいま、私たちはその淵の方へ、まっしぐらに押し流されているのです、しかも、このような台風のなかを！ 『きつと、私たちはちようど滞潮よどみの時分にあそこへ着くことになるう、——とすると多少は望みがあるわけだ』と私は考えました。——しかし次の瞬間には、少しでも望

みなどを夢みるなんてなんとという大馬鹿者おおばかものだろうと自分を呪のろいました。もし私どもの船が九十門の大砲を積載している軍艦の十倍もあつたとしても、もう破滅の運命が決つているのだ、ということがよくわかつたのです。

このころまでには、嵐の最初のはげしきは衰えていました。あるいはたぶん、追風で走つていたのでそんなに強く感じなかつたのかもしれない。がとにかく、いままで風のために平らにおさえつけられて泡立あわだつていた波は、いまではまるで山のようにもり上がつてきました。また、空にも不思議な変化が起つていました。あたりはまだやはり、どちらとも一面に真っ黒でしたが、頭上あたりにとつぜん円い雲の切れ目ができて、澄みきつた空があらわれ

ました、——これまで見たことのないほど澄みきった、明るく濃い青色の空です、——そして、そこから、私のそれまで一度も見なかったことのないような光を帯びた満月が輝きだしたのです。その月は私どものまわりにあるものをみな、中にはつきりと照らししました、——が、おお、なんとという光景を照らし出したことでしょうか！

私はそのとき一、二度、兄に話しかけようと思いました、——が、どうしたわけかわかりませんが、やかましい物音が非常に高く、耳もとで声をかぎりに叫んだのですけれども、一ことも兄に聞えるようにはできませんでした。やがて兄は死人のように真まつ蒼さおな顔をして頭を振り、『聴いてみる！』とでもいうようなふうには、

指を一本挙げました。

初めはそれがどういふ意味かわかりませんでした、——が間もなく恐ろしい考えが頭に閃ひらめきました。私はズボンの時計衣か囊くしから、時計をひっぱり出しました。それは止っています。私は月の光でその文字面をちらりと眺ながめ、それからその時計を遠く海のなかへ放ほうり投げてわっと泣きだしました。時計はぜんまいが解けてしまつて七時で止つていたのです！ 私どもは滞潮の時刻に遅れたのです。そして、ストロムの渦巻は荒れくるつている真つ最中なのです！

船というものは、丈夫にできていて、きちんと手入れがしてあり、積荷が重くなければ、追風に走つているときは、疾風するとき

の波でもかならず船の下をすべってゆくように思われるものです、——海に慣れない人には非常に不思議に思われることですが、——これは海の言葉では波に乗ると言っていることなのです。で、それまで私どもの船は非常にうまくうねり波に乗ってきたのですが、やがて恐ろしく大きな波がちょうど船尾張出部のカウンターのところ**にぶつかって、船をぐうつと持ち上げました、——高く——高く**——天にもとどかんばかりに。波というものがあんなに高く上がるものだということは、それまでは信じようとしたって信じられなかったでしょう。それから今度は下の方へ傾き、すべり、ずつと落ちるので、ちょうど夢のなかで高い山の頂上から落ちるときのように**気持が悪く眩暈めまいが**しました。しかし船が高く上がったと

きに、私はあたりをちらりと一目見渡しました、——その一目だけで十分でした。私は一瞬間で自分たちの正確な位置を見てとりました。モスケー・ストロムの渦巻は真正面の四分の一マイルばかりのところにあるのです、——が、あなたがいまご覧になった渦巻が水車をまわす流れと違っているくらい、毎日のモスケー・ストロムとはまるで違っているのです。もし私がどこにいるのか、そしてどうなるのか、ということを知らなかつたら、その場所がどんなところかぜんぜんわからなかつたことでしょう。ところが知っていたものですから、恐ろしさのために私は思わず眼を閉じました。眼瞼が痙攣でも起したように、ぴったりとくつついたのです。

それから二分とたたないころに、急に波が鎮しずまったような気がして、一面に泡に包まれました。

船は左舷さげんへぐいとなかばまわり、それからその新たな方向いなすまへ電のようにつき進みました。同時に水の轟く音は、鋭い叫び声のような——ちようど幾千という蒸気釜じょうきがまがその放水管から一時に蒸気を出したと思われるような——物音にまったく消されてしまいました。船はいま、渦巻のまわりにはいつもあるあの寄波よせなみの帯のなかにいるのです。そして無論次の瞬間には深淵しんえんのなかへつきこまれるのだ、と私は考えました、——その深淵の下の方は、驚くべき速さで船が走っているのでぼんやりとしか見えませんでしたが。しかし船は少しも水のなかへ沈みそうではなく、気泡きほうの

ように波の上を掠り飛ぶように思われるのです。その右舷は渦巻に近く、左舷にはいま通つてきた大海原おおうなばらがもり上がつていました。それは私たちと水平線とのあいだに、巨大な、のたうちまわる壁のようにそびえ立っているのです。

奇妙なように思われるでしょうが、こうしていよいよ渦巻の顎あごに呑まれかかりますと、渦巻にただ近づいているときよりもかえつて気が落ちつくのを感じました。もう助かる望みがないと心を決めてしまったので、初め私の元気をすっかり失なくした、あの恐怖の念が大部分なくなつたのです。絶望が神経を張り締めてくれたのでしようかね。

空威張からいばりするように見えるかもしれませぬ——が、まったくほ

んとうの話なんです、——私は、こうして死ぬのはなんと**いうす**ばらしいことだろう、そして、神さまの御力みちからのこんな驚くべき示顕しげんのことを思うと、自分一個の生命いのちなどという取るにも足らぬことを考えるのはなんと**いうば**かげたことだろう、と考えはじめました。この考えが心に浮んだとき、たしか恥ずかしさで顔を赧あからめたと思います。しばらくたつと、渦巻そのものについての鋭い好奇心が強くと心の中に起つてきました。私は、自分の生命を犠牲にしようとも、その底を探ってみたいという願いはつきりと感じました。ただ私のいちばん大きな悲しみは、陸おかにいる古くからの仲間たちに、これから自分の見る神秘を話してやることができまい、ということでした。こういう考えは、こんな危急な境

遇にある人間の心に起るものとしては、たしかに奇妙な考えです。——そしてその後よく考えることですが、船が淵のまわりをぐるぐるまわるので、私は少々頭が変になっていたのではなからうかと思えますよ。

心の落着きを取りもどすようになった事情はもう一つありました。それは風のやんだことです。風は私どものいるところまで吹いて来ることができないのです。——というわけは、さつきご覧になったとおり、寄波よせなみの帯は海面よりかなり低いので、その海面は今では高く黒い山の背のようになって私どもの上にそびえていたのですから。もしあなたが海でひどい疾風にお遭いになったことがないなら、あの風と飛沫しぶきとが一緒になってどんなに人の心

をかき乱すものかということは、とてもご想像ができません。あれにやられると目が見えなくなり、耳も聞えず、首が締められるようになり、なにかしたり考えたりする力がまるでなくなるものです。しかし私どもはいまではもう、そのような苦しみをよほどまぬかれています。——ちようど牢獄ろうごくにいる死刑を宣告された重罪人が、判決のまだ定まらないあいだは禁じられていた多少の寛大な待遇を許される、といったようなものです。

この寄波の帯を何回ほどまわったかということとはわかりません。流れるというよりむしろ飛ぶように、だんだんに波の真ん中へより、それからまたその恐ろしい内側の縁のところへだんだん近づきながら、たぶん一時間も、ぐるぐると走りまわりました。この

あいだじゆうずっと、私は決して環リング付螺釘ボルトを放しませんでした。兄は艦ともの方にいて、船尾張出部の籠かごの下にしつかり結びつけてあつた、小さな空からになつた水樽みずだるにつかまっています。それは甲板にあるもので疾風が最初におそつてきたとき海のなかへ吹きとばされなかつたただ一つの物です。船が深淵の縁へ近づいてきたとき、兄はつかまっていたその樽から手を放し、環リングのほうへやつてきて、恐怖のあまりに私の手を環リングからひき放そうとしました。その環リングは二人とも安全につかまっていられるくらい大きくはないのです。私は兄がこんなことをしようとするのを見たときほど悲しい思いをしたことはありません、——兄はそのとき正気を失っていたのだ——あまりの恐ろしさのため乱暴な狂人になつて

いたのだ、とは承知していましたが。しかし私はその場所を兄と争おうとは思いませんでした。私も二人のどちらがつかまつたところでなんの違ひもないことを知っていましたので、私は兄に螺釘を持たせて、艫の樽の方へ行きました。そうするのはべつに大してむずかしいことではありませんでした。というのは船は非常にしつかりと、そして水平になったまま、ぐるぐる飛ぶようにまわっていて、ただ渦巻がはげしくうねり湧き立わつているために前後に揺れるだけでしたから。その新しい位置にうまく落ちついたかと思うとすぐ、船は右舷の方へぐつと傾き、深淵をめがけてまっしぐらに突き進みました。私はあわただしい神さまへの祈りを口にし、もういよいよおしまいだなと思いました。

胸が悪くなるようにすうつと下へ落ちてゆくを感じたとき、私は本能的に樽につかまっている手を固くし、眼を閉じました。

何秒かというものは思いきって眼をあけることができなくて——いま死ぬかいま死ぬかと待ちかまえながら、まだ水のなかで断末魔のものがきをやらないのを不審に思っていました。しかし時は刻々とたつてゆきます。私はやはり生きています。落ちてゆく感じがやみました。そして船の運動は泡の帯のところになっていたと同じようになつたように思われました。ただ違うのは船が前よりもいつそう傾いていることだけです。私は勇気を出して、もう一度あたりの有様を見わたしました。

自分のまわりを眺めたときのあの、いく畏懼と、恐怖と、嘆美との

感じを、私は決して忘れることはありません。船は円周の広々とした、深さも巨大な、漏斗じょうごの内側の表面に、まるで魔法にでもかかったように、なかほどにかかっているように見え、その漏斗のまったくなめらかな面は、眼が眩くらむほどぐるぐるまわっていなかったなら、そしてまた、満月の光を反射して閃くもの凄すごい輝きを発していなかったら、黒檀こくたんとも見まがうほどでした。そして月の光は、さつきお話ししました雲のあいだの円い切れ目から、黒い水の壁に沿うて漲みなぎりあふれる金色こんじきの輝きとなつて流れ出し、ずっと下の深淵のいちばん深い奥底までも射さしているのです。

初めはあまり心が乱れていたもので、なにも正確に眼にとめることはできませんでした。とつぜん眼の前にあらわれた恐るべき荘

巖が私の見たすべてでした。しかし、いくらか心が落ちついたとき、私の視線は本能的に下の方へ向きました。船が淵ふちの傾斜した表面にかかっているのです、その方向はなんのさえぎるものもなく見えるのです。船はまったく水平になっていました、——というのは、船の甲板が水面と平行になっていた、ということですが、——がその水面が四十五度以上の角度で傾斜しているので、私どもは横ざまになっているのです。しかしこんな位置にありながら、まったく平らな面にいると同じように、手がかりや足がかりを保っているのがむずかしくないことに、気がつかずにはいられませんでした。これは船の回転している速さのためであつたらうと思います。

月の光は深い渦巻の底までも射しているようでした。しかしそれでも、そのあらゆるものを立ちこめている濃い霧のために、なにもはつきりと見分けることができませんでした。その霧の上には、マホメツト教徒が現世から永劫えいごうの国へゆく唯一ゆいいつの通路だという、あのせまいゆらゆらする橋(二)のような、壮麗な虹にじがかかっています。この霧あるいは飛沫は、疑いもなく漏斗の大きな水壁が底で合つて互いに衝突するために生ずるものでした。——がその霧のなかから天に向つて湧き上がる大叫喚は、お話ししようとしたつて、とてもできるものではありません。

上の方の泡の帯のところから最初に深淵のなかへすべりこんだときは、斜面をよほど下の方へ降りりましたが、それからのちはそ

の割合では降りてゆきませんでした。ぐるぐるまわりながら船は走ります、——が一樣な速さではなく——目まぐるしく揺れたり跳び上がったりして、あるときはたった二、三百ヤード——またあるときは渦巻の周囲をほとんど完全に一周したりします。一回転ごとに船が下に降りてゆくのは、急ではありませんでしたが、はつきりと感じられました。

こうして船の運ばれてゆくこの広々とした流れる黒檀の上で、自分のまわりを見渡していますと、渦に巻きこまれるのが私どもの船だけではないことに気がつきました。上の方にも下の方にも、船の破片や、建築用材の大きな塊や、樹木の幹や、そのほか家具の破片や、こわれた箱や、樽や、桶おけいた板などの小さなものが、た

くさん見えるのです。私は前に、不自然なくらいの好奇心が最初の恐怖の念にとつてかわつていたことを申しましたね。その好奇心は恐ろしい破滅にだんだんに近づくにつれて、いよいよ増してくるのです。私は奇妙な関心をもつて、私どもと仲間になつて流れている無数のものを見まもりはじめました。どうも気が変になつていたにちがいません、——そのいろいろのもののが下の泡の方へ降りてゆく速さを比較することに興味を求めさえしていたのですから。ふと気がつくときとはこんなことを言っているのです。『きつとあの櫂もみの木が今度、あの恐ろしい底へ跳びこんで見えなくなるだろうな』——ところが、オランダ商船の難破したのがそれを追い越して先に沈んでしまったので、がっかりしま

した。このような種類の推測を何べんもやり、そしてみんな間違
ったあげく、この事実——私がかならず見込み違いをしたという
その事実——が私にある一つながりの考えを思いつかせ、そのた
めに手足はふたたびぶるぶる震え、心臓はもう一度どきんどきん
と強く打ちました。

このように私の心を動かしたのは新たな恐怖ではなくて前より
もいっそう心を奮いたたせる希望の光が射してきたことなのです。
この希望は、一部分は過去の記憶から、また一部分は現在の観察
から、生れてきたのでした。私は、モスケー・ストロムに呑みこ
まれ、それからまた投げ出されてロフォーデンの海岸に撒き散ら
された、いろいろな漂流物を思い浮べました。そのなかの大部分

のものは、実にひどく打ち砕かれていました、——刺^{とげ}がいつぱいにつきたつて見えるくらい、擦^すりむかれてざらざらになつていました、——が私はまた、そのなかには少しもいたんでいないものもあつたことを、はつきり思い出しました。そこでこの相違は、ざらざらになつた破片だけが完全に呑みこまれたものであり、その他のものは潮時を大分遅れて渦巻に入つたか、あるいはなにかの理由で入つてからゆつくりと降りたために、底にまで達しないうちに満潮あるいは干潮の変り目が来てしまったのだ、と思うよりほかに説明ができませんでした。どちらにしろ、これらのものが早い時刻に巻きこまれたり、あるいは急速に吸いこまれたりしたものの運命に遭わずに、こうしてふたたび大洋の表面

に巻き上げられることはありそうだと考えました。私はまた三つの重要な観察をしました。第一は、一般に物体が大きければ大きいほど、下へ降りる速さが速いこと、——第二は、球形のものとその他の形のものとは、同じ大きさでも、下降の速さは球形のものが大であること、第三は、円筒形のものとその他の形のものとは、同じ大きさでも、円筒形がずっと遅く吸いこまれてゆくということでした。私は助かってから、このことについて、この地方の学校の年寄りの先生となんども話したことがあります、『円筒形』だの『球形』だのという言葉を使うことはその先生から教わったのです。その先生は、私の観察したことが実際に浮いている破片の形からくる自然の結果だということを説明してく

れました、——その説明は忘れてしまいましたが、——そしてまた、どういうわけで渦巻のなかを走っている円筒形のものが、他のすべての形をした同じ容積の物体よりも、渦巻の吸引力に強く抵抗し、それらよりも引きこまれにくいかということ、私に聞かせてくれたのです（15）。

このような観察を裏づけ、さらにそれを実地に利用したいと私に思わせた、驚くべき事実が一つありました。それは、渦巻をぐるぐるまわるたびに船は樽やそのほか船の帆桁ほげたや檣マストのようなもの、そばを通るのですが、そういうような多くのものが、私が初めてこの渦巻の不思議な眺めに眼を開いたときには同じ高さにあったのが、いまではずっと私どもの上の方にあり、もとの位置から

ちよつとしか動いていないらしい、ということなのです。

もう私はなすべきことをためらつてはいませんでした。現にかまつている水樽にしっかりと身を結びつけ、それを船尾張出部から切りはなして、水のなかへ跳びこもうと心を決めたのです。私は合図をして兄の注意をひき、側そばに流れてきた樽を指さし、私のしようとしていることをわからせるために自分の力でできるかぎりのことをしました。とうとう兄には私の計画がわかったものと思われました、——がほんとにわかったのか、それともわからなかつたのか、兄は絶望的に首を振り、環リング付螺釘ボルトにつかまつている自分の位置から離れることを承知しないのです。兄の心を動かすことはできないことですし、それに危急のさいで一刻もぐず

ぐずしてられないので、私はつらい思いをしながら、兄を彼の運命にまかせ、船尾張出部に結びつけてあつた縛しばりなわ索で体を樽にしつかり縛り、そのうえもう一刻もためらわずに樽とともに海のなかへ跳びこみました。

その結果はまさに私の望んでいたとおりでした。いまこの話をしているのが私自身ですし——私が無事に助かつてしまったことはご覧のとおりですし——また助かった方法ももうはやご承知で、このうえ私の言おうとすることはみんなおわかりのことでしょうから、話を急いで切りあげましょう。私が船をとび出してから一時間ばかりもたったころ、船は私よりずっと下の方へ降りてから、三、四回つづけざまに猛烈な回転をして、愛する兄を乗せたまま、

下の混沌こんとんとした湧きたつ泡あわのなかへ、永久にまつさかさまに落ちこんでしまいました。私のからだを縛りつけた樽が、渦巻の底と、船から跳びこんだところとの、中間くらいのところまで沈んだころに、渦巻の様子に大きな変化が起りました。広大な漏斗の側面の傾斜が、刻一刻とだんだん峻けわしくなくなってきました。渦巻の回転もだんだん勢いが弱くなります。やがて泡や虹が消え、渦巻の底がゆるゆると高まってくるように思われました。空は晴れ、風はとつくに落ち、満月は輝きながら西の方へ沈みかけていました。そして私は、ロフオーデンの海岸のすつかり見える、モスケー・ストロムの淵がさつきまであったところの上手の、大洋の表面に浮び上がっているのです。滞潮よどみの時刻なのです、——が海

はまだ台風の名残りりで山のような波を揚げていました。私はストロムの海峡のなかへ猛烈に巻きこまれ、海岸に沿うて数分のうちに漁師たちの『漁場』へ押し流されました。そこで一艘そうの船が私を拾いあげてくれました、——疲労のためにぐったりと弱りはてている、そして（もう危険がなくなつたとすると）その恐ろしさの思い出のために口もきけなくなつてゐる私を。船にひきあげてくれた人たちは、古くからの仲間や、毎日顔を合せてゐる連中でした、——が、ちょうどあの世からやってきた人間のように誰ひとり私を見分けることができませんでした。その前の日までは鴉からすのように真っ黒だった髪の毛は、ご覧のとおりに白くなつていました。みんなは私の顔つきまですっかり變つてしまつたとい

ます。私はみんなにこの話をしました、——が誰もほんとうにしませんでした。今それをあなたにお話ししたのですが、——人の言うことを茶化してしまうあのロフオーデンの漁師たち以上に、あなたがそれを信じてくださるうとは、どうも私にはあまり思えないんですがね」

(1) 「暗黒の海」——昔、地中海沿岸の住民に知られない外海（大西洋）のことをかく言ったのであるという。

——前の「ヌビアの地理学者」というのは誰のことか、はつきりわかっていない。ポーの晩年の論文『ユウレ

カ』のなかには、「ヌビアの地理学者 Ptolemy Hephesion によつて記述された暗黒の海」云々^{うんぬん}とあるが、これはポーの思い違いであるらしく、おそらくアレクサンドリアの天文地理学者 Claudius Ptolemy ではなからうかと言われている。

(2) 強風のとくに船が海上で安全のため、帆を低く下げあるいは絞つて、できるかぎり風の方へ船首を向け、ほとんど静止していること。

(3) chopping —— 強い潮流の方向と反対に風が吹くとき、あるいは二つの潮流が合するときなどに生ずるように、波が短く不規則に乱れたように立ち騒ぐこと。かりに

「狂い波」と訳しておいた。

- (4) [Maelstrom] ——ノルウエー北部の海岸にある有名な大旋渦^{だいせんか}。モスケン（モスケー）・ストロムとも呼ばれる。原語読みならばメールシトルムとでも書くべきであるが、ここでは英語読みにした。前のノルドランド（ノルラン）以下の固有名詞も必ずしも原語読みにしたがわず、便宜上の読み方を用いた。島の名などは多く作者の創作にかかるものらしい。

- (5) Jonas Rannus（一六四九—一七二八）——ノルウエーの僧侶^{そうりよ}。ノルウエーの地理および歴史に関する著述がある。

- (6) ギリシャ神話の冥府めいふにある燃ゆる炎の河。
- (7) アイスランドの東南、スコットランドの北方の洋上にある諸島。
- (8) Athanasius Kircher (一六〇一—一八〇) ——ドイツの数
学、言語学、考古学の学者。
- (9) バルチック海の北方の海。
- (10) 向い風のために帆がマストに吹きつけられること。
- (11) できるだけ風の来る方に近く帆走し上がることに。
できる
- (12) 船首から船尾にいたるまですっかり平坦へいたんに張られた
上甲板。通し甲板。
- (13) ring-bolt ——綱などを結びつけるために甲板に取り付

けられた環かんのついた螺釘ねじくぎ。環釘。

(14) マホメツト教徒の信ずるところによれば、現世から天国へ至るには蜘蛛くもの糸よりも細い橋を渡るのである。その橋を渡るときに罪ある者は地獄の深淵しんえんに落ちるという。

(15) アルキメデス『De Incidentibus in Fluido』第二巻を見よ。(原注)

青空文庫情報

底本：「黒猫・黄金虫」新潮文庫、新潮社

1951（昭和26）年8月15日発行

1995（平成7）年10月15日89刷改版

2004（平成16）年2月5日100刷

入力：kompass

校正：土屋隆

2005年11月1日作成

2014年3月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

メールストロムの旋渦

A DESCENT INTO THE MAELSTROM

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 エドガー・アラン・ポー Edgar Allan Poe
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>